中高生の部　課題　「走れメロス　その1」　太宰治

ナレ①：メロスは、単純な男であった。

買い物を、背負ったままで、のそのそ王城にはいって行った。

たちまち彼は、巡邏の警吏に捕縛された。

調べられて、メロスの懐中からは短剣が出て来たので、騒ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。

王：「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」

ナレ①：暴君ディオニスは静かに、けれども威厳を以て問いつめた。

その王の顔は蒼白で、眉間の皺は、刻み込まれたように深かった。

メロス①：「市を暴君の手から救うのだ。」

ナレ①：とメロスは悪びれずに答えた。

王：「おまえがか？」

ナレ①：王は、憫笑した。

王：「仕方の無いやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」

メロス①：「言うな！」

ナレ①：とメロスは、いきり立って反駁した。

メロス①：「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。

王は、民の忠誠をさえ疑って居られる。」

王　：「疑うのが、正当の心構えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。
人の心は、あてにならない。
人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」

ナレ①：暴君は落着いて呟き、ほっと溜息をついた。

王　：「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

メロス①：「なんの為の平和だ。自分の地位を守る為か。」

ナレ①：こんどはメロスが嘲笑した。

メロス①：「罪の無い人を殺して、何が平和だ。」

王　：「だまれ、下賤の者。」

ナレ①：王は、さっと顔を挙げて報いた。

王　：「口では、どんな清らかな事でも言える。
わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。
おまえだって、いまに、磔になってから、泣いて詫びたって聞かぬぞ。」

メロス①：「ああ、王は悧巧だ。自惚れているがよい。
私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。
命乞いなど決してしない。ただ、――」

ナレ②：と言いかけて、メロスは足もとに視線を落し瞬時ためらい、

メロス①：「ただ、私に情をかけたいつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えて下さい。
たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。

三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰って来ます。」

王　：「ばかな。」

ナレ②：と暴君は、嗄(しわが)れた声で低く笑った。

王　：「とんでもない嘘を言うわい。逃がした小鳥が帰って来るというのか。」

メロス①：「そうです。帰って来るのです。」

ナレ②：メロスは必死で言い張った。

メロス①：「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許して下さい。

妹が、私の帰りを待っているのだ。

そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市(し)にセリヌンティウスという石工(いしく)がいます。

私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いて行こう。

私が逃げてしまって、三日目の日暮(ひぐれ)まで、ここに帰って来なかったら、あの友人を絞め殺して下さい。たのむ、そうして下さい。」

ナレ②：それを聞いて王は、残虐(ざんぎゃく)な気持で、そっと北叟笑(ほくそえ)んだ。

（生意気なことを言うわい。どうせ帰って来ないにきまっている。

この嘘つきに騙された振りして、放してやるのも面白い。

そうして身代りの男を、三日目に殺してやるのも気味がいい。

人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代りの男を磔刑(たっけい)に処してやるのだ。

世の中の、正直者とかいう奴輩(やつばら)にうんと見せつけてやりたいものさ。）

王　：「願いを、聞いた。その身代りを呼ぶがよい。
三日目には日没までに帰って来い。
おくれたら、その身代りを、きっと殺すぞ。
ちょっとおくれて来るがいい。
おまえの罪は、永遠にゆるしてやろうぞ。」

メロス①：「なに、何をおっしゃる。」

王　：「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。
おまえの心は、わかっているぞ。」

ナレ②：メロスは口惜しく、地団駄(じたんだ)踏んだ。ものも言いたくなった

配役
ナレーション①　・・・A
ナレーション②　・・・B
メロス①　・・・C
※選考の結果、配役を決定します。

王　・・・渡部陽一